



一、

ホテル平行。私は両親を待っていました。一人で、家の中で、電気もつけずに。両親はどこへ出掛けたのかは分かりませんでした。間もなく戻って来る気配だけがありました。裏の扉の鍵を開ける音、鍵は古いものですから、がちゃがちゃと何度も動かさなければ決して空きません。

二、

それを、ホテルパラレル、お父様は、間もなくして、必死に回し、家へ入って来ました。私が
結界と呼んでいる、小さな家の中に。お父様はやや酩酊気味で、楽しげに私の名を呼びました。
出掛ける前は体調不良で不機嫌だったのに、何があったのでしょうか。

三、

私はそんなお父様の姿を見て、却って気分が悪くなりました。階段を、ホテルパラレル、狭く高い階段を、お父様が前、お母様が後ろの順で上っていらっしゃります。私は真夏の蒸し暑さにかまけて顔を洗っておらず、前髪が額に貼り付いていました。

四、

服は汗臭く、アスンシオンの気候を体現しているようで、或いはそう、ボゴタの日中のようでもありました。南は、太陽に、近い。太陽は常に南にあります。両親は、その最中を汗一粟かかず、帰って来たのです。ホテルパラレル。

五、

私は、お父様から差し出された瓶麦酒を飲みながら、ダイニングで気分が悪く、お母様の時折質問される、新しい仕事についてのお話、いい加減な返事をしていたような気がします。やがて、そこに気付いた酩酊のお父様が、詳細を聞き出そうと問い掛けました。

六、

「君、新しい仕事は見つかったのかね」ホテルパラレル。「いえ、友人のついでで頼んでいたお仕事、イスタンプルのガラタ地区でウェイトレスをするというホテルパラレル、お話、あれはなくなりました。ニューオーリンズのカフェは潰れたそうです」「君、適当な嘘を吐くものではない。僕達には分かっているよ。君が彼らと連絡すらとっていないことを」

七、

国際電話が高い。それだけの理由で私は連絡をあまりとりませんでした。その点は事実であります。両親が、娘のかけた国際電話を肩代わりするのも如何なものかと思ったのです。「ホテル平行、あなた、娘は、ジジジと不快な音を立てているようです。嘘を吐いているのです」「そうだね、君、不快な、旧式発電機のようなだ」

八、

「私は嘘など吐いておりません。通話記録を！」「最近の若い娘は、皆そうやって物証を持ち出そうとする」「ええ、あなた、そのようです」私はさすがに怒りを覚えました。「嘘など吐いておりません。ガラタの料理店は言葉が通じない点から立ち消えになり、ニューオーリンズは、なくなりました。今や町すら」ホテルパラレル。

九、

哀しい事態なのです。私は様々な場所で職を探したものの、何一つ上手く行かなかった、それだけだというのに。「娘、君、ねえ、嘘を吐くのは本当に止めたまえ」「嘘を吐いていますね、娘。あなたをこれまで養って来たけれど、お金はもう渡しません。ホテルパラレル」

十、

ホテルパラレル。嗚呼、そのようにして私の小さな胸は爆破され、肋骨が背骨から外れかけました。ホテルパラレル。私の手は麦酒瓶に伸び、いつの間にかお父様の頭を割っていたのです。

十一、

「君、娘、僕の頭を割っても何一つ出て来ない。アルコールくらいのものだ」「ええ、あなた、娘はただ慌てているだけです」ジジジ。私の口は、開かないまま、歯の隙間から、不快な音を発します。「娘、ほら、嫌な音を出して」「ああ、まったくだ。この先養って行くなどとてもとても」ホテルパラレル。

十二、

お父様の頭を醜く割った瓶は、頭蓋骨に跳ね返されてやはり碎け散っていました。その尖った部分を使って、ホテル平行、自分の両腕をざくりざくり、深くなぞるように、混乱したまま傷つけて行くと、肋骨を吹き飛ばした怒りは更に増幅されて行くようでした。

十三、

お母様は何も言わず、ランダのような表情をして固まっていっしやり、お父様は罵倒の言葉を投げ掛けて来ました。「君、娘、その下らない瓶を捨てなさい。君が自傷をしようとも、僕達の心は変わらない。自傷などというものも、きっと嘘なのだろう。そうに決まっている」

十四、

「え、え、あ、なた」お母様の口調はたどたどしくなりました。私の右足はお母様を放って、お父様の脛や股、腹を蹴りました。ホテルパラレル。「やめ、なさ、む、す」お母様の仰る言葉は既に原型を留めていません。瓶で肩や頭をひどく叩く私は、やはりランダの形相になっていたかもしれません。

十五、

「娘、君、ホテルパラレル、無駄な抵抗というものだよ。既に手遅れかもしれない」仰る通り、全ては手遅れのように感じられました。「全ては嘘なのだ。全ては嘘なのだ。全ては嘘なのだ」煩い、と思いました。ホテルパラレル。いい加減やめろというお説教も聞かず、罵倒も無視して私は自分とお父様を殴り、刺し、蹴りました。

十六、

アスンシオンの、よく見られる光景だったように思います。間もなくお父様は狭く、高い階段を落ちて行き、ヒヨドリを閉じ込めた鉄の箱に頭をぶつけて動かなくなりました。お母様はそこに至って初めて泣きました。私も、同じように、ホテルパラレル、涙を流し、髪を白く染め、服を身体に貼り付かせて、肩で息をしながら、腕の痛みを知ったのです。

十七、

ホテルパラレル。そう、全て手遅れであり、何もかもを失ったと、やっと理解したのです。お金はもうありませんでした。働き口も見つからず、ボゴタにもアスンシオンにもガラタ地区にも破壊されたニューオーリンズにも、居場所はありませんでした。

十八、

ランダと化したお母様と生きて行くしか。ホテルパラレル。そう、真夏に繁殖した赤蟻がジジジと煩くて、このような羽目になったのです。ホテルパラレル。ホテルパラレル。私は、ホテルパラレルの娘。お父様を埋めました。両腕に包帯を巻くと汗でべたべたし、傷口が膿むのです。間もなく沸いた小虫が肉を食み、骨から飛び立ちます。鳥のように。